



31 雪・月・花・茶詩書 京都市美術館蔵

# 鉄

# 齋

— 書卷の気あふれる書 —

平成21年10月7日(水) ~ 12月13日(日)

前期 10月7日(水) ~ 11月8日(日)  
後期 11月11日(水) ~ 12月13日(日)

10時 ~ 16時 月曜日休館 但し10月12日(月)、11月23日(月)は開館 翌日休館  
11月10日(火)は展示替えのため休館



21 魁星齋 京都市立嵯峨小学校蔵 (京都市学校歴史博物館管理)

富岡鉄斎（1836～1924）は最後の文人画家としてその評価は不動のものとなっているが、その書もまた高い評価を受け、多くの愛好者に親しまれている。そしてそれらは京都の神社仏閣の門前に鉄斎の原書になる碑や老舗に掲げられた扁額など、我々の日々の生活においても特に目に触れる機会が多い。

「鉄斎―書巻の気あふれる書―」と題する本展では画工といわれることを嫌い、生涯学者、儒者としての矜持を続けた鉄斎の書、今なお我々を魅了して止まないその書とはどのようなものなのかを考える機会としたい。

先ず「書巻の気」という言葉について説明したい。鉄斎と親交があった神田香巖を祖父に持ち鉄斎の最晩年を知る碩学神田喜一郎の「わたしの好きな書」と題する随筆がある。それによると学問に徹することによって生まれる一種の香気ともいべきものを中国では書巻の気といい、その気が尊いとある。例として、乾隆帝や後宇多天皇、花園天皇など中国や日本の帝王の名の他、貫名菘翁、内藤湖南が挙げられ、万巻の書を読み、万里の路を行くという董其昌の言葉を実践した鉄斎の書についても述べられている。

鉄斎が青年期を過ごした幕末から明治初年の京都には独特の細い書体で自作の和歌を書いた大田垣蓮月がいて、蓮月に私淑し大きな影響を受けた鉄斎は蓮月に似た細い線で俗に針金鉄斎と呼ばれるような文字を書いている。維新で活躍した志士達もまた書をよくした。鉄斎が生徒兄事した山中信天翁をはじめ江馬天江、谷如意等も多くの作品を遺している。鉄斎は漢学・儒学・国学など、学問を修めるかたわら彼等との交友の中で書の研鑽に励んだと思われる。そして万余の書を読破し、そこから深い教養と該博な知識を得、心に刻まれた詩句や鑑戒の言葉、自作の詩文を、それぞれに相応しい書体で書した。その書体は篆・隸・楷・行・草・仮名・神代文字と豊富で、時にそれらが入り交じり独特の書となっている。

若き鉄斎は高価な『説文解字註』の原刻版を手に入れ、また晩年に至っても『鐘鼎字源』を離さなかったという。絵を独学で学んだと同様、書についても座右に中国唐代の顔真卿、清代の金冬心、鄭板橋等の書を置き、篆書は石鼓文や清の鄧石如から学んだ。そして多くの法帖や碑帖を蔵していたことも知られ、これらを熟覧し臨書した。

では出品作品の中から特に2点を取り上げて見たい。

《魁星贊》(No21) 京都市立嵯峨小学校の所蔵する作品。鉄斎は多くの魁星図を描きその贊に魁星贊を書いている。魁星は北斗七星の第一星で文運を司る星とされ、中国では科挙の試験を受ける者が祀り、及第を祈念したという。小学生にこの贊文の意味を解することを望むのはかなり無理があると思われるが、鉄斎は学ぶ事の大切さと読書の重要な事を将来のある子供達に伝えたかったのであろう。心身共に充実の時期を迎える鉄斎が躍動感にあふれ緩急自在に書したこの書は60歳代の代表作と言っても過言ではない。因みに京都市立嵐山小学校には鉄斎の《魁星図》が蔵されている。

《雪・月・花・茶詩書》(No31) 唐の詩人白居易が洛陽分司となって赴任する際、その送別の宴が長安の興化亭で開かれ、朝賢各々が一字から七字の詩を賦し題を以て韻とした。鉄斎はその中から雪・月・花・茶の四詩を選び、題字は篆書で、詩文は行草で書いている。篆書は力強く堂々とした書であり、行草で書かれた詩文は文字の大小強弱が自由に入り交じり詠うが如き書風となっている。70歳代の鉄斎が書に於いても自由で豪快な作風に変遷していく事を感じさせる秀作である。なお、「茶」の字は篆体がないので「茶」の篆体を代用している。鉄斎生誕150年記念「富岡鉄斎展」（1985年）を記念して清澄寺より京都市に寄贈された書の代表作品。

以上の2点は鉄斎が万巻の書を読むことを自身に課し、生涯実践しそこから該博な知識を得、日々の研鑽はもちろんのこと、学者としての姿勢が生んだ作品といえる。これらの作品を前に我々が感じるのが書巻の気というものであり、これこそ鉄斎の書の最大の魅力ではなからうか。鉄斎は我が国の書では貫名菘翁を高く評価している。菘翁もまた儒者として多くの蔵書を持ち長年の修練によって名作を遺した。鉄斎はそうした菘翁の書に書巻の気を感じたのであろう。鉄斎が晩年自らの書を弘法大師や菅原道真と同格に語られるだろうなど不遜とも思える言葉を遺し、また若き泰斗内藤湖南や長尾雨山等の書も自分には及ばないと語ったこともすべて、万巻の書を読破し学者として生きたことの自負の表れといえる。鉄斎の書を語るとき我々は「書は人なり」といい、必ず「金石の気」のあることを述べるが、「書巻の気あふれる」という言葉は最もその書の特性を示す最高の賛辞と思われる。

本展では新に収蔵した書簡『笠原墨華堂宛』(No65)、『山田介堂宛』(No66)をはじめ89歳で没するまでの書簡も併せて展示し、書簡においても書風の変遷とともに書巻の気を感じていただければ幸いである。（奥田素子）

#### 【参考】

- 本田成之『富岡鉄斎』（中央美術社、1926）
- 神田喜一郎「わたしの好きな書」（『墨林問話』岩波書店、1977）
- 正宗得三郎『鉄斎』（平凡社、1961）
- 青木勝三『文人書譜12 鉄斎』（淡交社、1979）
- 野中吟雪『鉄斎の書』（日本習字普及協会、2007）
- 奥田素子「鉄斎 書に託した精神」（鉄斎美術館、2007）

## 《出品目録》

番号	名 称	制 作 年	年 齡	本 紙 寸 法	材 質・技 法	形 状
1	皇国名之書	慶応 2 (1866)	31	26.4× 485.6	紙本 墨書	折 本
2	宗廟之詩書	明治 2 (1869)	34	133.9× 29.6	紙本 墨書	掛 幅
3	童僮房開拓境之詩書	明治 4 (1871)	36	150.8× 37.1	紙本 墨書	掛 幅
4	写懷詩書		30代	137.5× 29.2	紙本 墨書	掛 幅
5	西遊旧詩書		30代	120.0× 28.0	紙本 墨書	掛 幅
6	多少箴書		30代	67.0× 30.0	紙本 墨書	掛 幅
7	書聯		30代	(各) 124.0× 12.0	紙本 墨書	掛 幅
8	文天祥正氣歌書		30代	110.5× 53.6	紙本 墨書	掛 幅
9	虛白書		30代	28.1× 70.3	紙本 墨書	額
10	骨董說書・諸葛侯戒子書		30代	28.2× 418.0 28.2× 383.7	紙本 墨書	折 本
11	險者君子之德也書	明治16 (1883)	48	33.0× 134.0	紙本 墨書	額
12	和氣清麻呂公詩二行書		40代	134.2× 32.4	紙本 墨書	掛 幅
13	帝道唯一書	明治24 (1891)	56	28.0× 69.0	紙本 墨書	掛 幅
14	菅公水中月詩書		50代	133.4× 43.8	紙本 墨書	掛 幅
15	弔武田耕雲斎及烈士墳詩書		50代	135.2× 33.0	紙本 墨書	掛 幅
16	不如学書		50代	33.8× 106.5	紙本 墨書	額
17	習字帖		50代	29.0× 760.0	紙本 墨書	折 本
18	寿山福海書	明治32 (1899)	64	41.5× 138.0	紙本 墨書	額
19	落款手本	明治34 (1901)	66	29.7× 1575.0	紙本 墨書	折 本
20	陶然書	明治36 (1903)	68	33.2× 96.0	紙本 墨書	額
21	魁星贊		60代	135.8× 130.9	紙本 墨書	額
22	君子修道之語書		60代	138.2× 44.3	紙本 墨書	掛 幅
23	千秋萬萬歲書		60代	123.9× 30.7	紙本 墨書	掛 幅
24	萬国度皇風書		60代	33.5× 141.3	絹本 墨書	額
25	「四方の海」句		60代	36.5× 6.1	紙本 墨書	短冊
26	「小車乃」句		60代	36.5× 6.1	紙本 墨書	短冊
27	長生安樂書	明治43 (1910)	75	45.0× 198.0	紙本 墨書	額
28	森寛斎十七年祭賦書	明治43 (1910)	75	136.2× 33.9	紙本 墨書	掛 幅
29	葵詠歌	大正 1 (1912)	77	37.4× 41.0	紙本 墨書	掛 幅
30	投心遵朝命書	大正 2 (1913)	78	34.4× 134.3	絹本 墨書	額
31	雪・月・花・茶詩書		70代	(各) 137.0× 68.0	紙本 墨書	二曲屏風
32	火用慎書		70代	113.2× 25.7	紙本 墨書	掛 幅
33	五福寿為先書		70代	40.6× 153.7	紙本 墨書	額
34	松蘿窟書		70代	52.0× 135.6	絹本 墨書	額
35	澄心得妙觀書		70代	46.0× 179.4	絹本 墨書	額
36	「生延て」句		70代	36.6× 6.0	紙本 墨書	短冊
37	萬歲書	大正 4 (1915)	80	39.7× 89.2	紙本 墨書	掛 幅
38	萬歲二大字書	大正 4 (1915)	80	199.5× 89.2	紙本 墨書	掛 幅
39	安心立命詩書	大正 5 (1916)	81	126.1× 43.4	絹本 墨書	掛 幅
40	慎忍書	大正 5 (1916)	81	41.5× 131.5	絹本 墨書	額
41	白居易問鶴詩書	大正 6 (1917)	82	135.5× 53.0	紙本 墨書	掛 幅
42	南山祝寿長書	大正 7 (1918)	83	136.2× 41.3	絹本 墨書	掛 幅
43	百事樂嘉辰書	大正 7 (1918)	83	48.7× 193.0	絹本 墨書	額
44	煙雲供養幀 聯添	大正 7 (1918)	83	133.0× 45.5 他	紙本着色・墨書	掛 幅
45	四君子図 裏面	大正 8 (1919)	84	155.0× 195.0	桐本着色・墨書	四曲屏風
46	南極寿老星図 添祝寿聯	大正 9 (1920)	85	132.5× 52.0 他	紙本着色・墨書	掛 幅
47	丈夫心事二行書	大正 9 (1920)	85	130.5× 32.0	紙本 墨書	掛 幅
48	投義志所希書	大正 9 (1920)	85	125.0× 38.5	絹本 墨書	掛 幅
49	福星開寿域書	大正 9 (1920)	85	42.2× 143.5	絹本 墨書	額
50	瘞筆塚書	大正 9 (1920)	85	78.2× 42.5	紙本 墨書	掛 幅
51	「住よしの」句	大正 9 (1920)	85	36.2× 6.0	紙本 墨書	短冊

52	賀立志成功詩書	大正10(1921)	86	144.4× 39.8	紙本 墨書	掛 幅
53	紙田墨稼書	大正10(1921)	86	47.0× 175.0	紙本 墨書	額
54	須耐煩書	大正10(1921)	86	36.9× 113.8	紙本 墨書	額
55	試筆小詩書	大正12(1923)	88	131.5× 28.6	紙本 墨書	掛 幅
56	寢言書	大正12(1923)	88	38.8× 47.0	紙本 墨書	掛 幅
57	松風蘿月書	大正12(1923)	88	31.5× 126.7	紙本 墨書	額
58	凌雲書	大正12(1923)	88	32.5× 66.6	紙本 墨書	額
59	春光庵書	大正13(1924)	89	31.8× 108.0	紙本 墨書	額
60	前赤壁賦書	大正13(1924)	89(90)	(各) 32.7× 264.4	紙本 墨書	折 本
61	菅公御作十一面觀世音菩薩書	大正13(1924)	89(90)	150.2× 37.4 他	紙本 墨書	掛 幅
62	石水院書	大正13(1924)	89(90)	27.2× 87.6	紙本 墨書	額

[書 簡]

番号	名 称	制 作 年	年 齢	材 質・技 法	形 状
63	富岡春子宛 18通のうち		30～40代	紙本 墨書	未 装
64	石崎平八郎宛 11通のうち		60～70代	紙本 墨書	卷 子
65	笠原墨華堂宛 20通のうち		80代	紙本 墨書	卷 子
66	山田介堂宛 15通のうち		80代	紙本 墨書	未 装
67	清澄寺坂本光浄宛 13通のうち		80代	紙本 墨書	卷 子

作品の訓読・大意はパネルで展示してありますが、そのうち訓読は原則として現代仮名遣いとし、漢字は通行の文字を用いました。誤字、脱字は「鉄斎研究」により補正しました。

- ・ 出品作品は期間中下記の通り2回にわけて展示します。但し一部作品は重複することがあります。  
前期 10月7日(水)～11月8日(日) 後期 11月11日(水)～12月13日(日)

- ・ 下記の日程で学芸員による展示説明会を行います。  
10月17日・31日、11月21日、12月5日 各土曜日午後1時30分より

- ・ 今回の展覧会にあたり貴重な作品をご出品、ご協力いただきました方々のご芳名を下記に記して謝意を表します。  
京都市立嵯峨小学校 (No.21)・京都市美術館 (No.31)  
京都市学校歴史博物館

- ・ 次回展覧会 「鉄斎と蓮月」 平成22年1月8日(金)～3月14日(日)

清荒神清澄寺 鉄斎美術館 〒665-0837 宝塚市米谷字清シ一番地  
TEL (0797) 84-9600  
FAX (0797) 84-6699  
<http://www.kiyoshikojin.or.jp>